

# 冬ごもり

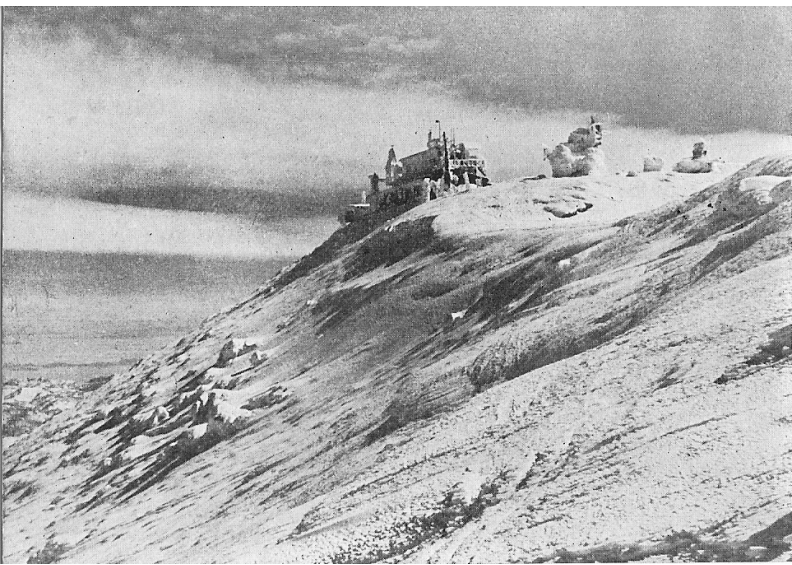
中谷宇吉郎

青空文庫



第6圖 ニセコ山頂の冬ごもり







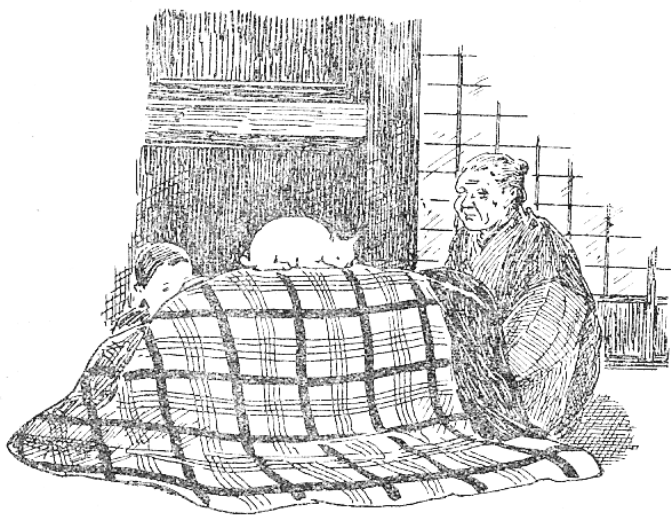
## 冬ごもり

## 第7圖

冬ごもりといえ、二米も三米もある深い雪に埋もれて、薄暗い部屋の中で炬燵にもぐり込んで、じつと春の來るのを待つような生活を考える人が多いであらう。そして今までの我が國での冬ごもりといえ、事實そういう生活を指していることが多かった。秋田縣や山形縣から、雪の名所新潟縣はもちろんのこと、北陸地方一帯にかけて、私たちの祖先はそういう冬ごもりの生活を、今までに千五百年くらいもの間、ずっと續けて來ていた。そしてそれはごく近年までも續いているのである。

ところが世界はまことに廣大なもので、それに科學の進歩は止るところを知らない。それで廣く世界を見渡してみると、いろいろな冬ごもりが近年にはなされていた。そのうちで冬ごもりの世界記録というものを探すとしたら、それはソ聯のパパーニン一行の北極に於ける冬ごもりを第一に擧げるべきであろう。

ソ聯は國力を強めるために、國土計畫というものをたてて、國土全體の生産を如何にしてあげるべきかを、たくさん科學者を集めて二十年來研究させ、それを着々と實行して來ていた。もちろんあの廣大なシベリアの開発も、その中での重要な題目であった。そのためには北方の氣象をよく知る必要がある。それにソ聯では、北極洋を碎氷船によって航海しようという、たいへんな大



事業を計畫していた。そのためにも北方の氣象、特に北極附近の氣象を、一年を通じて測らねばならないので、その準備を、もう二十年も前から進めていた。

その準備が大體完了したので、いよいよ北極の氷の上に觀測所を作つて、其處へ學者をやつて、一冬の間冬ごもりをさせて、氣象觀測をやるうということになった。そういう夢のような計畫をほんとうに實行しようということにしたのが、昭和十二年の春であつた。即ち日華事變の始まつた年のことである。

北極には陸地は無いので、氷原の上にテントを張つて、そこで一冬を過そうというのである。この觀測には、北極の氣象に關しては世界的の學者である。パーニンを隊長として、皆で四人の學

者があたることになった。四人の人間が、北極の氷の上で一年間住み、氣象の觀測をして、その報告を毎日モスコへ無電で通報しようというのであるから、その準備がたいへんである。せっかく北極で冬ごもりをするのであるから、普通の氣象の觀測以外に、海洋學や地球磁氣の研究もすることになり、その器械も持つて行くことにした。

一寸考えてみても、北極で一年暮すというのであるから、テント、食糧、防寒具、觀測器械、無電の發信器と受信器、その電源、燃料、醫藥品などなど、たいへんな荷物である。途中で何か欲しいといつても、來年の夏までは届ける方法もないのであるから、器械が故障を起した場合の部分品から修理道具までも持つて行か

ねばならない。四人の観測者とこれだけの荷物とを運ぶのに、船はとても北極までは行けないし、昔の北極探検隊のように犬そりでは到底望みがない。犬そりによる北極や南極の探検は、数人の探検家が辛うじて極地に達して、すぐ歸つて來ることすら、非常な難事業だったのである。

それでけつきよく飛行機で行くより外に方法がない。しかしそれだけの人と荷物とを載せた飛行機が北極まで飛んで、北極の氷原上に着陸して、人と観測所とを残して、又飛び歸つて來るというのは、夢のような話である。しかしソ聯は、この人類の夢をほんとうに實現したのである。全器材と人員とを、四臺の大型飛行機に積み込んで、モスコーを出發し、無事にそれを北極まで届け

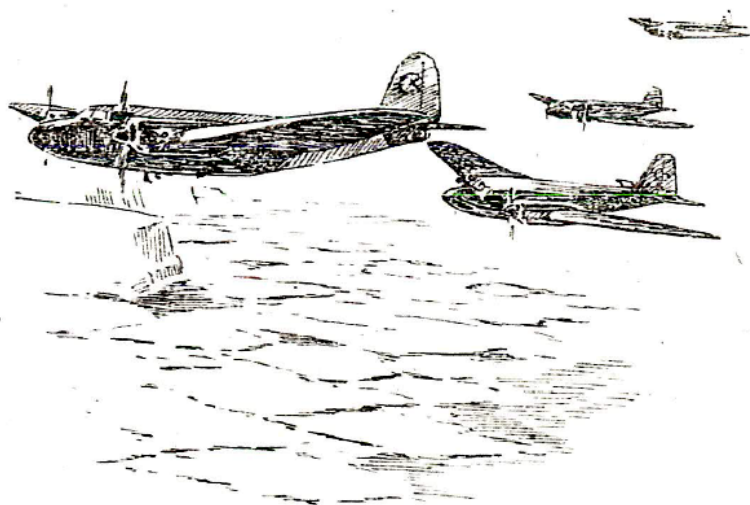
て、歸つて來たのである。それが昭和十二年のことであつて、日本では東京札幌間の定期航空が、冬近くなると、もう危険だといつて休んでいた頃の話である。

## 第8圖 北極飛行

この飛行機を指揮したのは、ヴオドビヤーノフという飛行家であつた。三月の終り近く、<sup>みぞれ</sup>霰まじりの天候について、モスコーを出發した四臺の大型機は、飛行界最大の難問の一つである着氷の危険を巧みに逃げながら、三カ月がかりで、遂にその任務を完了して、無事モスコーへ歸還したのである。六月二十五日の午後五時かつきりに、四臺の飛行機の編隊が、再びモスコーの上空に現

われた。そしてその飛行士たちの一行が、クレムリンの宮殿に於けるスターリンの観迎宴に参列していた時刻には、北京の郊外は險惡な空氣につつまれ、銃を磨いていた兵隊もあつたことであろう。そしてこの日から僅か旬日後、七月七日の深夜に、蘆溝橋畔に銃聲がひびき、日本の運命を決すべき日華事變が勃發したのである。世界中の國が科學に邁進しているのに、日本だけが滿洲事變だの日華事變だのに邁進していたのは、科學無き國の悲しい運命であつた。

北極に残つたパーニンの一行は、無事に冬を越し、その間毎日觀測結果をモスコーへ打電し續けた。ところが、その氷原が徐々に動き出したのである。觀測所のテントと四人の學者とを載せ



たまま、氷原は切れて、グリーンランドの方向へ漂流を始めた。

そして翌年の夏、その氷塊がだんだん小さくなり、遂に崩潰しようとする直前に、彼等は再び飛行機によつて救い出されたのである。その間、北極洋中を漂流する氷の上のこの移動観測所の中で、彼等はずっと観測を續けていたことはもちろんである。

この北極の冬ごもりを、世界での一方の横綱とすれば、今一方の横綱が大關くらいのところに、アメリカのバード少將の南極の冬ごもりがある。この方は詳しい記録は今手許にないが、南極大陸のつつきの所に設置した米國探検隊の基地から、何百キロかずっと南極の方へ進んだところに、前進基地を作ることになった。其處で一冬中氣象の観測をしようというのである。その前進基地

は、設備の關係上、冬ごもりの人は一人だけしか收容出來なかつた。誰か一人だけその氷の中の小觀測所に立てこもつて、一冬過さねばならない。途中病氣になつても、吹雪に埋まつてしまつても、救いに行くことは出來ないのである。そういう話になつた時に、その任務を買つて出たのは、隊長のバード少將自身であつた。

南極の恐ろしい冬を目前にして、遠征隊の一行は、バード少將をその場所へ送りとどけて、歸つて來た。もうあとは來年の春まで、どんな事件が起つても、助けに行くことはもちろん、連絡をとる方法も無いのである。もつとも電話は架設してあつたので、毎日聲の連絡だけは出來た。バード少將は、この氷の家の中で、唯一人で冬を越し、觀測を完了した。氷塊を積んで作つた氷の廊

下を通つて、小さい圖書室へ行つて、そこから本を持って來て讀んでいた。

途中でバード少將は風邪をひいた。そしてそれは一時かなり惡くなつた。しかし電話では、一言も病氣のことを言わず、毎日無理をして元氣な聲を出して、話をしていた。それで基地にいた隊員たちは、春になつて少將を救い出しに行くまでは、その病氣のことは全然知らなかつたそうである。

## 第9圖　バード少將

アメリカにしても、ソ聯にしても、偉い學者が自ら卒先して、



こういう死地には入り込んで、自然の神祕をさぐり、科學のために邁進していたのである。そして羨しいことには、そういう科學上の大事業に、國家を擧げて後援を惜しまなかったのである。そういう國が優者となつて地球上に残るのは、當然のことである。

こういう話と比較したら、まるで大人と子供よりもつとかけはなれた話であるが、私たちは、この戦争の間、北海道のニセコアンヌプリという山の頂上で、二冬冬ごもりをした。目的は雪中飛行に關聯した航空氣象の研究のためであつた。

この山は、約千四百米くらいの高さで、山としては高山の部類にははいらないかもしれない。しかし日本海から吹きつけて来る冬の季節風をともに受ける難所である。途中で、富士山頂の觀

測所長で、十何年も冬の富士山頂を知っているF氏の訪問を受けたことがある。「永年富士へ登っていますが、こんなひどい日には滅多にありません」という話であつたから、まず内地の三千米級の高山と似た程度の氣象條件と思つていいであろう。

眞冬でも零下二十數度止りで、案外氣温はそう低くないのであるが、厄介なのは風である。一度四十五米という風を、風力計で記録したことがある。普通口ではよく五十米の烈風などというが、そんな風は滅多に無いものである。雪山で正味三十米の風にあうと、とても立つては居られない。雪の上に腹ばいになって、風の息をうかがいながら、一寸弱くなつた隙にちよこちよこと動いて、又腹ばいになるという状態である。三十五米になると、腹ばいに

なつていても吹きとばされるので、はい松にしがみついて、待っていなければならないくらいである。

人間の身體に感ずる寒さ、即ち體感温度は、氣温とはちがうので、風があるとひどく寒く感ずる。感ずるだけでなく、實際に凍傷を起し、凍死の原因となるのは、氣温ではなくて、體感温度の方である。氣温が低くなると、風速一米が氣温の二度くらい、或はそれ以上にも相富するのである。それでニセコアンヌプリの山頂では、私たちは、體感温度にしたら、零下八十度にも九十度にもなるところで、實驗をしていたわけである。

そういうところに觀測所を建てて、多い時には二十人以上、少い時でも十人くらいの研究者と技術員とが、冬ごもりをした。そ

して氣象の觀測をしたり、精密を要する物理の實驗をしたりして二冬を越した。水は無いので、雪をとかして炊事をし、夜は六疊の間に八人くらいの割合でごろねをした。今から考えてみると、元氣なものであった。そういう研究者たちに、軍需工場の徴用工並みの特配もして貰えなかったが、誰も不平を言わずに、一所懸命に研究をした。

成果は別問題としても、一冬に延べ二千人以上の人員が、この山頂で研究と工作とに従事し、その間一人の病人も出なかった。よほど皆の氣分が緊張していたのであろう。それに毎日のように下と連絡の用事があつて、冬中これ等の人員が登り降りをしていった。それでいて二冬の間、一人も事故を起さなかったことは、

非常に幸運なことであつた。

もつとも或る晩、物凄い吹雪で、ごうごうと山が鳴り、家がゆれるような天候の時に、眞暗な外で、一寸風の音にまぎれて、人聲のようなものを聞いた。どうも人聾らしいというので、晝の實驗に疲れた研究者たちが、せっかくぬいだ防寒服を又着込んで、懷中電燈をたよりに搜索に出かけた。そしたら尾根のつつきのところ、危く倒れかけている連絡員を見つけることが出来て、それをかつぎ込んだというような危いこともあつた。二三度そういうこともあつたが、けつきよく二冬の間に一度も事故を起さなかつたのは、天祐というより外にはないであらう。

越冬者の數と、仕事の量からいえば、このニセコアンヌプリ山

頂の冬ごもりくらいが、日本の冬ごもりのレコードであるかもしれない。

ソ聯やアメリカの話と較べたら、まことに情ない話であるが、それくらいのところ、實力相當なところだったのであろう。しかし諸君が大きくなる頃には、日本の國も今少しは科學を大切にしようになっているであらう。そうしたら、バード少將やパーニンのような人も出て来るにちがいない。

(二一、一〇、二二)



# 青空文庫情報

底本：「霧退治 — 科學物語 —」岩波書店

1950（昭和25）年3月15日第1刷発行

初出：「北方風物 第一卷第十二号」北日本社

1946（昭和21）年12月10日

※初出時の署名は「冬ごもり三題」です。

入力：いしかわ けん

校正：塚本由紀

2014年9月11日作成

2014年10月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 冬ごもり

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>